

【授業実践開発班：ウ 倫理 単元「日本人としての自覚（日本思想）」】

「教科書ごと」を「自分ごと」に置き換えて“問いを立てる力”を育てる日本思想 —「単元を貫く問い」で「期待する生徒像」を目指すアクティブラーニング—

1 はじめに

ともすると倫理は用語説明や人物紹介を一方向的にレクチャーして、まるで「倫理史」の授業のように展開されてしまう。先哲の思想を手がかりに自分の在り方・生き方を「考える」には、考える時間を授業の中に保障する必要がある。授業の内外で自ら考えることやコミュニケーション能力が大事と言いながら、そういう場面を確保しないのは責任放棄とも思える。本校の学校教育目標の一つは主体性の育成であり、授業時間もその達成に向いているのは当然である。高校の道德教育の核となる「倫理」が、「考え、議論する倫理」として機能するためにも対話や協働の時間は欠かさず差し込み、年間を通して全面的にアクティブラーニングを実践する。主体的に考え行動できる生徒を育てるために、各単元でまとまりのある目標を掲げ、毎時の授業の「めあて」に向けたスモールステップを踏むという学びを試みたい。

2 実施する科目 公民科・倫理

3 日時・場所 令和2年8月25日（火） 社会科教室

4 学級 第2学年5組（普通科）男子17名 女子24名 計41名

5 単元名 「日本人としての自覚（日本思想）」

6 単元の目標（※本稿は、新学習指導要領における科目の目標や観点別評価に基づいて実践する）。

古来の日本人の考え方や日本の先哲の考え方を手がかりとして、国際社会に主体的に生きる日本人としての在り方生き方について多面的・多角的に考察したり表現したりする活動を通して、次の資質・能力を身に付けることができるようにする。

7 単元の指導計画（19時間）

(1) 単元の配当時間

第一次 （単元の導入）古代日本人の思想 3時間

第二次 日本の仏教思想 3時間

第三次 近世日本の思想 4時間

第四次 西洋思想の受容と展 5時間

第五次 （単元のまとめ）日本人としての自覚と現代日本の課題 4時間

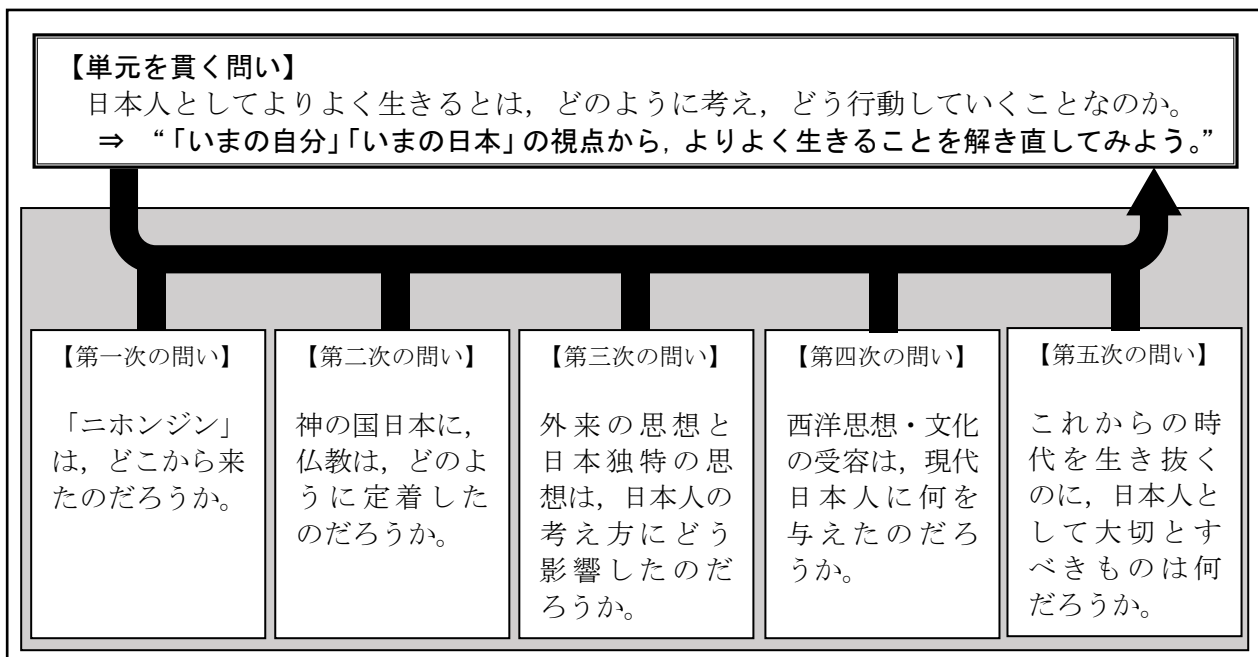
(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 日本人に見られる人間観や自然観、宗教観について、古来の日本人の心情と考え方や日本の先哲の思想、外来の思想の受容などを基に理解している。 代表的な日本の先哲の思想について、原典などの諸資料を活用しながら、日本人としての自覚を深め、国際社会に生きる日本人としての在り方生き方を追究・構想しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本人としての自覚に立ち、他の国の人々や文化を尊重して、国際社会から期待される立場や社会の変容について多面的・多角的に考察、構想し、表現している。 日本人の在り方生き方の学びを通して、自分自身の生き方を問い直したり現代社会における課題と結び付けたりして、倫理的な判断基準を形成している。 	<ul style="list-style-type: none"> 現代に生きる自己の課題と人間としての在り方生き方に関わる事象や課題について主体的に追究したり、他者と共によりよく生きる自己を形成しようとしたりしている。

(3) 指導と評価の計画（単元を貫く問い）

全単元で思想家や重要語句を「いまの自分」「いまの日本」の問題意識や課題に結び付けて検討し、よりよく生きるためにどう考え、どう行動していくことが大事なのかについて、自分ごとの視点から考察できているか、授業の様子やワークシートの内容から評価・判断する。

年間の学習目標（期待する生徒像）を「自ら多面的・多角的に考察、構想し、表現している生徒」とし、それに向けて本単元を貫く問いを設定し、毎時の授業の指導のねらいは生徒の取組の実態に応じて、指導計画に関わらず、指導内容や支援の在り方を適宜見直して年間目標を達成するよう努める。



8 本時の学習

- 本時の指導 古来日本に外来の仏教思想がどのように浸透・定着したか班で調べて全体に発表する。また発表内容と結び付いた現代日本の課題や日常生活問題で「問い」を立てて全体で協議、検討する活動を通して、倫理の学習内容を身近な考察問題へ落とす構想力を身に付ける。
- 教材 教科書「高校倫理 新訂版」(実教出版)、資料集「最新図説 倫理」(浜島書店) 自作ワークシート

(3) 本時の指導計画

○「評価に用いる評価」

●「学習改善につなげる評価」

次	ねらい・学習活動等	評価の観点			評価規準（評価方法）
		知	思	態	
1 時 間	<p>【第二次のねらい】 日本に外来の仏教思想がどのように浸透・定着したか班で調べて発表するとともに、発表内容と結びついた現代日本の課題や日常の生活問題で「問い」を立てて全体で協議、検討させる活動を通して、倫理の学習内容を身近な考察問題へ落とす構想力を身に付けさせる。</p>				
	<p>【第二次の問い】 神の国日本に、仏教は、どのように定着したのだろうか。</p> <p>◇聖徳太子から鎌倉仏教にかけての仏教思想について調べ、発表する。また、担当した発表内容を現代日本の課題や日常の生活問題に転用した問いを立てて、全体で協議、検討する。</p> <p>問 神の国日本に、仏教は、どのように定着したのだろうか。</p> <p>留)・グループが設定した「問い」が全体で協議するのにふさわしいものとなるように、できるだけ肯定・否定、賛成・反対の枠組みで検討できるような問題設定となるように指示する。</p> <p>・グループから提起された「問い」が全体で協議するのにふさわしくない場合には、いったん保留とし、全体協議の前に再検討させて修正を求める。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>〈調べ学習・発表テーマ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仏教伝来と奈良仏教の特徴 ・ 平安仏教の特徴と末法思想 ・ 聖徳太子 ・ 鑑真 ・ 最澄 ・ 空海 ・ 源信 ・ 法然 ・ 親鸞 ・ 栄西 ・ 道元 ・ 日蓮 </div> <p>◇各グループから提起された問いに対して、グループごとの協議に参加するとともに、自分自身の考えを整理し、考察したことを表現している。</p> <p>留)・グループ内の協議や全体に報告された意見などを手掛かりにして、ワークシートには自分自身の考えを記述するように強調する。</p>	●	●	<p>●思想家の考えや仏教の特徴を分かりやすく伝えるとともに、それを具体的な日常問題に落として「問い」を設定、構想している。</p> <p>(成果物、発表内容)</p>	
		○	○	<p>○グループ内で話し合ったことや他グループの意見を基に、自分の考えを深めたり、学習内容を具体的に理解したりしている。</p> <p>(ワークシート)</p>	

(4) 本時の評価基準

担当した思想を全体に分かりやすく表現するとともに、各班から提起された問いに対して、考察を深め、自分自身の考えを整理し、表現している。

9 生徒が見方・考え方を働かせた場面

「倫理」の学習事項を単なる知識としてとどめず、それを「自分ごと」に落とす学びを継続して重ねてきた。この思想家が「いまの自分」に言いたいことは何なのか、その考え方が「いまの世の中」にどんな手がかりを与えてくれるのかなど、学習事項と自分の在り方・生き方とを常に往復する営みを繰り返すことで、先哲の思想が別単元の学習の中でも生きるだけでなく、生徒が抱える目の前の迷いや課題にヒントを与え生きて働く指針になる。

10 まとめ

(1) 成果

生徒が主体的に考えるようになるにはどうすればよいか。独り善がりの考えに陥らず他者の意見に耳を傾けるにはどうすればよいか。協働したり表現したりする力を伸ばすにはどうすればよいか。その答えは、全てアクティブラーニングの中にある。説明的で、与えるだけの授業で、それを達成しようという方が難しい。知識理解の定着だけをねらうなら、講義型の方が効率的なのかもしれない。けれども時代は目指す資質・能力を、学び続けようとする態度や思考力・判断力の育成へとシフトしてきている。思考力・判断力・表現力の育成を目標に掲げた本実践は、それを達成するための時間や場面を授業の中に全面的に保障したことで、期待どおりの成果が認められた。他者と協働したり、主体的に考えようとしたりする学びを通して別のことにも見方・考え方を働かせ、「倫理」という科目の中にとどまらず、日常の課題や自分の生き方へと転用できるのは、この科目が期待する資質・能力の本丸である。自ら調べる、まとめるといった取組を繰り返すうちに、教科書程度は自分たちで読解できるようになり、「学び方」を示しさえすれば、生徒は自ら理解しようとする事ができる、まさに主体的な学びの姿勢が確認できた。

(2) アクティブラーニングへの躊躇

私は全ての授業でアクティブラーニングに舵を切ったが、そこには相当な迷いや思い切りも必要だったし、今も悩みが尽きるわけでもない。ただ、主体的・対話的で深い学びが叫ばれる今、少なくとも講義型で展開することの限界は明白となった。ここで、よく聞かれることに応答したい。まず、「教科書を教え込まない授業でも、知識理解の定着は大丈夫か？」大丈夫である。それでセンター試験や模擬試験の成績が落ちたことはない。むしろ、講義型の授業で習ったことは忘れやすいが、調べたり発表したりしたことは意外と頭に残っているという生徒は多い。次に、「調べたりまとめたりしていると、教科書を終えられないのではないか？」むしろ今の方が進度は速い。全てを説明しようとするれば時間は足りないが、的確に指示さえ出せば、強制しなくとも生徒は自主的に調べたりまとめたりしようすることができる。最後に、「アクティブラーニングをどう実践すればよいか？」実は生徒の方がよく分かっている。入学したばかりの高校1年生でも、班を作ったり話し合ったり、全体に発表するのも驚くほど上手にできる。中学校までの学びを高校教員は意外と分かっている。せっかく持ち合わせている高い技能を、高校の学びに上手に接続するだけのひと工夫が求められる。

(3) 課題

生徒の学びの適切な評価は、教員が授業改善の視点をもつための重要な指標になる。思うように生徒の学びがはかどらないのは指導の見直しが必要なことを意味している。生徒の実態に応じて、評価規準を再設定したり、授業手法そのものを考え直したりする柔軟性も必要だ。生徒の思考を揺さぶりながら、知識・技能の定着や学びに向かう姿勢を高める手だてについて不断の検討が要請されている。

また、知識理解は思考・判断するための前提であり軽視されてはならないが、それが大半を占めるようなチョーク&トークからは脱却した方がよい。スタディサプリの動画コンテンツでも見られるような説明を、わざわざ生徒を教室に集めて私たちが再現する意味があるかどうか、要検証事項なのである。本実践では、生徒が活発に議論したり、伝える工夫をしたりして、科目柄それは道徳教育でもあり、キャリア教育でもあるような側面が見られる一方で、「学級会」とも映ってしまうくらいを超えて、やはり倫理の学習事項に戻し改めて考え直すという営みも十分にする必要があった。